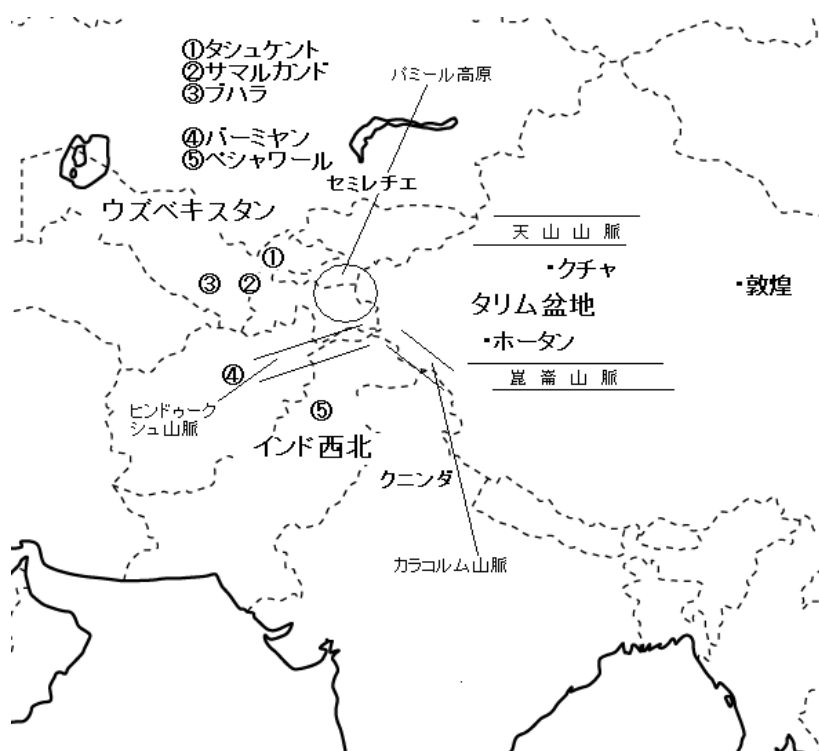


二言語併用貨幣の伝播：周辺へ

紀元前 2 世紀前半にインド西北の地においてギリシア系のバクトリア王国より二言語併用貨幣が発行され¹、その後もこの地において同様の貨幣は発行され続けた²。

この二言語併用という新たな貨幣様式はインド西北の地だけでなくその周辺の地にも伝播したわけであるが、ここでは古代文字資料館が所蔵するものによって伝播の状況の一端を確認してみようとおもう。

まずはインド西北地域の周辺図をご覧いただきたい。



グプタ 2001(もと 1969)によると、インド方面では北インドや西インドに各種の二言語併用貨幣がみられるようである。ここでは北インドのクニンダの貨幣(カローシュティー文字とブラーフミー文字による)を紹介する。

つぎにタリム盆地周辺をご覧いただきたい。ここにはホータンのシノ・カローシュティー一銭(紀元後 2 世紀後半。漢字とカローシュティー文字)や、クチャの亀茲五銖銭(紀元後 5~7 世紀。漢字とブラーフミー文字)がある。

¹ ヒンドゥークシュ山脈を越えてインドの西北に進出したデメトリオス 1 世の息子には、デメトリオス 2 世(前 180-前 165)、アガトクレス(前 180-前 165)、パンタレオン(前 185-前 175)の三人がおり、それぞれの王名の二言語併用貨幣が発行された。デメトリオスとするものはギリシア文字とカローシュティー文字によるものであり前田 1992(161 頁)によるとこれは 2 世の発行に係るといふ。アガトクレス、パンタレオンとするものにはギリシア文字とブラーフミー文字によるものがある

² イラン系の所謂インド・スキタイ朝、クシャンのクシャン朝においてギリシア文字とカローシュティー文字銘文をもつ二言語併用貨幣が発行されたが、紀元後 2 世紀中ごろクシャンのカニシカ王に到ってカローシュティー文字によるインド俗語(ガンダーラ語)の銘文は用いられなくなった。

そして最後に、セミレチエ地方の貨幣（紀元後 8 世紀。ソグド文字と漢字）をみることにする。

■クニンダの銀貨

これは紀元前 1 世紀、インド北方（現在のデリーの北方）のクニンダ族発行の銀貨とされているものである³。



左

右

表裏両面に異なる文字と言語による銘文がある二言語併用貨幣。先ず写真左をご覧ください。インドの伝統的なシンボルマークの周囲にカローシュティー文字で書かれたインド俗語（ガンダーラ語）がある。右から左に読む二行の銘文が貨幣の周辺に沿って配されている。一行は、4 時の位置より反時計回りに貨幣の内側より見て ra[nā]（王か?）、[ku]nīdasa（クニンダの）、amogha[bhu]tisa（アモガブティの）とある。[]は Allan1936: 159 で補った部分。他の一行は、4 時半の位置より時計回りに貨幣の外側より見て maharajasa（大王の）とある。なお、maharajasa の ja の字形であるが、規範的なものにはラテン文字の y のように下に突き出る部分がある。しかしながらこの貨幣ではそれが見られない。

次に、写真右をご覧ください。女神とみられる立像と鹿の周囲にブラーフミー文字でかかれたインド語（サンスクリット語か?）が一行ある。9 時の位置より時計回りに貨幣の内側よりみて rājñah（王の）、ku[nim]dasa（m の上に点。クニンダの）、[amogkabhuti]sa（アモガブティの）、mahā[rāja]sa（大王の）とある。[]は Allan1936: 159 で補った部分。なお、Allan1936: 159 は三箇所属格語尾を sya (or sa) とするが、この貨幣では sa となっている。表裏の銘文はともに“クニンダの王、大王アモガブティの”と読める。

この貨幣は、円形で両面金型打刻であり、銘文は二言語併用で王名の属格を含む。これらの点よりみて、ギリシア系バクトリア王国で発行された二言語併用貨幣をまねたものと

³ Allan1936 の 159 頁参照。

みて大過ない。もっとも、山崎 1997: 197-198 によれば、王の像がみられない点、ギリシア文字を使わずインド文字のみを使用する点、図像にインド土着の神々やインドの伝統的なシンボルマークを用いる点が外来民族(バクトリア、インド・スキタイ、クシャンなど)と異なっており、部族貨幣には隣接する外来勢力に対する土着勢力の抵抗の意思が示されているという。

■シノ・カロシュティー小型銭 紀元2世紀後半

これはタリム盆地の南西の辺縁に位置した于闐国(現在の中国・ホータン)関わる貨幣とみられている。于闐のシノ・カロシュティー銭としては大型と小型の二種が知られており銘文の内容も異なる。これは小型の貨幣である。小谷 1999 によるとこの種のシノ・カロシュティー銭の発行年は紀元後 170 年前後という。なお、これと同種の貨幣が鮮明な写真とともに『新疆錢幣』で紹介されている⁴。表裏両面に異なる文字と言語による銘文があり、いわゆる二言語併用貨幣となっている。



左

右

まず、写真左をご覧ください。馬の図像の周囲にカロシュティー文字で書かれたインド俗語(ガンダーラ語)がある。7 時の位置より反時計回りに貨幣の内側よりみて“maharaja[sa](大王の)・・・[gu]rgasa (グルガの)”と読めそうである。もっとも maharaja[sa]の ha, ja および[gu]rgasa の rga および sa の字形には問題があり、あるいはそのように読むことができるかもしれないという程度のものである。

次に、写真右をご覧ください。図像はない。右上に“六”の下部の二点が“ハ”のようにみえる。下に篆書体の“銖”があり、左に“錢”とある。“六銖錢”と読める。これは貨幣の単位である。

この貨幣は、卵形の両面金型打刻で、写真左をみると図像の周囲に銘文が配されている。銘文はカロシュティー文字で王名の属格が含まれているから、これはギリシア系バクトリア王国以来のインド西北に出現した二言語併用貨幣の影響を受けて作られた貨幣とみて

⁴ 『新疆錢幣』14-15 頁。

大過はないのであろう。もっとも、右は漢字銘文が全面に配されており、これまで見てきた貨幣とは趣を異にする。さらに漢字・漢文の方は貨幣単位である。これまでの二言語併用貨幣は表裏両面にほぼ同一銘文を配するから、ずいぶんと趣を異にする。

なお、先に述べたように、この貨幣のカロシュティー文字には問題があり、あるいは後代に模造したものであるかもしれない。もっとも、周辺に伝播した結果、銘文の字形が崩れ意味をなさなくなるような事例はしばしばみられることである。したがって銘文が不備であるからといって後代の模造であると即断するわけにはいかない。

■ 亀茲五銖錢

これはタリム盆地の北の辺縁に位置した亀茲国の貨幣。蘇曄・劉玉榮 1998 によると紀元後 5 世紀～7 世紀に鑄造されたものという。亀茲は現在のタリム盆地北側の庫車（クチャ）県に相当する。玄奘『大唐西域記』（7 世紀前半）の屈支国（亀茲）の条に「貨幣には金銭・銀銭・小銅銭を使用している」とある「小銅銭」がこれであるともいわれている。



左



右

先ず写真右をご覧ください。ここには漢字・漢語で“五銖”とあるはずであるが、右に漢字篆書体の“五”に相当する文字がかろうじて見える。左の漢字篆書体の“銖”に相当する文字は摩滅のためほとんど見えない。

次に写真左をご覧ください。蘇曄・劉玉榮 1998:54-56 によるとブラーフミー文字で書かれたトカラ語であるらしい。下は数字の「50」、上はよく分からないが「銖」の 1/10 に当たる単位ではなかろうかとのこと。この説が正しいとするならば、これも二言語併用貨幣ということになる。

このような貨幣単位の二言語併用銘文の位置づけは難しいが、次のような流れの中に置いてみることも可能であろう。すなわち、バクトリア貨幣の表裏両面にある「王名属格」と「王名属格」の二言語併用銘文 → 于闐国シノ・カロシュティー小型銭の表裏両面にある「王名属格」と「貨幣単位」の二言語併用銘文 → 亀茲国五銖銭の表裏両面にある「貨幣単位」と「貨幣単位」の二言語併用銘文、という流れである。これらのうち、于闐国のシノ・カロシュティー小型銭をバクトリア以来の二言語併用貨幣の系譜に列なるものとして大過はないであろう。そうであるならば、シノ・カロシュティー小型銭のタイプを過渡

的なものとして、亀茲五銖銭のような貨幣単位による二言語併用貨幣ができたとしてもそれほど不都合はないであろう。このように考えて亀茲五銖銭を二言語併用貨幣の系譜に連ねたいのである。

もっとも、亀茲五銖銭とシノ・カロシュティー小型銭とは形態と製造法は異なる。亀茲五銖銭の形態は方孔円形で、その製造法は鋳造であるから、これは中国の貨幣様式によったものである。

■ソグド銭

これはセミレチエ地方で出土するソグド文字・ソグド語銘文をもつ貨幣で、その形態は方孔円形で製造法は鋳造であるから中国の貨幣様式によったものである。К а м ы ш е в 2002 によると紀元後 8 紀前半のものという。

先ず写真左をご覧頂きたい。方孔の周囲にソグド文字によるソグド語が一行配されている。8 時の位置より貨幣の内側よりみて xwt'w(王)、w['xswt'wy](ヴァクシュタヴの)、pny(貨幣)とある。語訳および[]はК а м ы ш е в 2002 による。

次に写真右をご覧いただきたい。上および左にセミレチエのタムガ(シンボルマーク)があり、下に漢字の“元”がある。この“元”は、おそらく唐代に発行された開元通寶の“元(始まり、根源)”に相当するのであろう。二言語併用貨幣ということになる。



左



右

形態と製造法は中国の貨幣様式である。写真右の紋章と漢字の配置は、漢字を上下左右に配する中国銭の様式を受け継いでいる。しかしながら、写真左の銘文は、中国の伝統とは相容れない。王名を含むところは、マケドニアのフィリップス 2 世以来のギリシア貨幣様式を髣髴とさせる。しかも、二言語併用貨幣であるから、これはギリシア系バクトリア王国の貨幣に発する二言語併用貨幣の系譜に列なる貨幣とすることができよう。

【参考文献（発行年順）】

John Allan 1936. *Catalogue of the Coins of Ancient India*. London: The British Museum. First Indian Edition 1975. By Oriental Books Reprint Corporation.

新疆錢幣圖冊編輯委員會 1991. 『新疆錢幣』 新疆美術攝影出版社・香港文化教育出版社。

田辺勝美編 1992. 『[平山コレクション]シルクロードのコイン』 講談社。

前田耕作 1992. 『バクトリア王国の興亡』 (レグルス文庫), 第三文明社。

モーリス・ポープ著/唐須教光訳 1995. 『古代文字の世界 エジプト象形文字から線文字Bまで』 講談社学術文庫。

山崎元一 1997. 『世界の歴史3 古代インドの文明と社会』 中央公論社。

蘇擘・劉玉榮 1998. 『古幣尋珍』, 文物出版社。

小谷仲男 1999. 「シノ・カロシュティ貨幣の年代 —付録『後漢書』西域伝訳注一」, 『富山大学人文学部紀要』 第30号, 17-48頁。

P. L. グプタ著/山崎元一他訳 2001. 『インド貨幣史 —古代から現代まで』 刀水書房。

А. Камышев 2002. Раннесредневековый монетный комплекс Семиречья. Бишкек: Паритет Инфо.

(文責: 吉池孝一 2010. 7. 13)